舞鶴地区の美術工芸調査

美術工芸研究室

舞鶴市教育委員会から舞鶴地区の美術工芸品調査の依頼をうけた。この地区の調査は、これまでなされたことはあるが、市教育委員会の計画で総合調査を実施するのは最初のことである。

調査の主旨は、この地区にはすでに早くから指定をうけている国宝、重要文化財、重要美術品はかなりあるが、このさい、これらの物件を確認し、それら以外の彫刻、絵画、工芸作品の、いわゆる美術ー芸品の調査をして、それらを舞鶴地区の文化史的基盤解明に役立つ資料にし、この地区に遺存する文化財を保存保護する行政的な面から、それらの作品リストを作成したいとの依頼であつた。

市教育委員会の要望に答えることが出来るか、否か、は別として、私達の責務はかゝる要望に添うべく努力することである。その意味で私はこの依頼に応じ美術工芸研究室全員が調査した。四月は二日間、七月は六日間、十一月は五日間の期間で都合三回にわたり調査したが、七月調査には京都国立博物館の毛利久技官の応援を仰いだ。

今度の調査対象場所は寺院のみに限定されたが、その調査対象の寺院は、円隆寺、多門院、金剛院、松尾寺、桂林寺、大聖寺、東本願寺長雲寺、竜勝寺、多禰寺、雲門寺、地雲寺、長江寺、大泉寺、高福寺宝寿寺、本行寺、般若寺、荘厳寺、法心寺、仏心寺、大明寺、海嶋寺海臨寺、真宗寺、妙法寺、善福寺、医王寺、瑠璃寺、仁寿寺、永福寺の三十一ヶ寺及び西大浦千歳村の村共有のお堂など数ヶ所にわたり、調査総物件は三百二十一件余の多きを数えた。

一、工芸作品の調査

工芸作品が絵画、彫刻の作品に比してきわめて少数であることが注意を引く。件数にして三〇件にもみたない事実は全く意外であつた。工芸作品は一般的にいつて使用による破損、さらに、誰れもが簡単に持ち運べる軽便さも手伝つて保存という点からみるとなかなか困難である。何らかの強い保存処置が講ぜられない限りは寺院であれ、個人であれ、長く伝えることは至難であろう。舞鶴地区も例外ではなく、どの寺院も仏器、仏具の類は殆んど新しい作品がおかれていた。

この地区に深い関係をもつ当時の一流文化人だつた細川幽斉、三斉父子の関係遺品がかなり伝えられていると思つていたが、これらも寺院からすでに離れた現状である。

今回の調査で知られたことは、作品に地方的作風の見られないことで、地方には地方特有の作風がよくみうけられるが、こゝではそれがみられない。このことは絵画、彫刻作品にも共通したものでこれは、

かつての舞鶴地区の文化のありかたを明示するものともいえよう。

また、作風はともかくとして、寺院に奉納された作品が殆んどの寺院に伝えられているが、これらの作品から寺院をとりまく信仰の実態などが知られ、さらに、製作年代、作家名まで判明するのは郷土史的価値の高い資料といわねばなるまい。その二、三を紹介すれば、

第1図　天日台　松尾寺

加佐岡田中富室の般若寺にある鐘をみると　銅製で口径25.5cm、総高115.8cmの作品で池の間に刻銘がある。

鋳小鐘一口□鳶家山　専英居士之冥福
丹後加佐郡滝有路住、田村李左衛門勝盛喜捨之
元禄十五壬午歳三月吉辰
慧光山般若禅寺　住持月隠山識之

とあり、元禄十五年に誰れがどんな理由でこのお寺に鐘を納めたかが知られ、その堂内の住職も知られる一つの記録であろう。

荘厳寺の銅製の雲板をみると、竪49.0cm横48.0cmの作品で表面に刻銘がある。

施主　上粟飼村庄屋　新宮治郎寄附
旨　宝暦六丙子之十月廿六日
粟飼上村慧覚山　荘厳禅寺什物
現住令者代
丹波福智山住　足立大和　藤原重次作之

とあつて、作者が知られるものの一つ。

仁寿寺の鑿子をみると、銅製で径40.5cm高さ33.5cmの作品で側面に刻銘がみられる。

丹後国加佐郡田辺郷水清山仁寿寺常住周牧代
享保五年庚子十月廿四日古鑿破替之
金竜子作

また、永福寺の銅製で径37.0cm高さ59.0cmの鐘にみられる銘は、

丹波国乗田郡亀山帰命山専念寺江
奉寄進半鐘右志之意趣者
為松平氏前伊州大守源忠山公御菩提
為同普光院殿　前伊州起誉勇哲存光居士御菩提為実翁宗幽信士菩提
為浄屋妙清信女菩提
施主　奥山検校心海僧正敬白
法名　心鏡院宗誉心眼宗春居士
貞享五戊辰歳九月朔日
南無阿弥陀仏
忍誉了天代
治工洛陽釜座住　近藤丹波掾佐久

これらの作品はいづれも普通作品で、殊に技術的に優れた作品とはいえないが、作品に刻まれた銘文により製作年代、作者、製作由来などが明確に知られる点は貴重な資料と云はねばならない。年代が新しくともその時代におけるその土地、その寺院のありかたを知ることが出来る記録でもある。この地区には、殆んど江戸期のものであるがこのような作品がどこの寺院にも伝えられていることは一つの特色ともみられよう。

数少ないが、年代もよく作風もいい作品を求めると、

孔雀文磬（口絵）一面　　多禰寺蔵

銅製　肩幅18.8cm　高さ8.2cm　裾張20.3cm　　鎌倉時代

磬は中国では古くから祭祀の際に楽器として用いられたもので、石製のものがはじめとされ、最も秀れたものは玉質のものとされていた。周末戦国時代頃から鋳銅製のものが作られたとされているが、わが国では奈良時代には法具としてすでに使用されている。平安朝に入つてから今みられる様な形式になり、法会の際の必須道具となつた。この磬は作風もすぐれた片面だけに孔雀文様を鋳出している。撞座は重弁の蓮華で孔雀を向い合わせているもので鎌倉期によくみられる文様構成である。しかし、胎もわりに薄手で、股入りも浅く蓮華の中房の形式もまだ藤原的な姿をかなり残している作品で、鎌倉期も初期の作品とみられる。

天目台（第1図）一基　　松尾寺蔵

木製朱漆箔押　高さ10.0cm　口径8.5cm　底径7.3cm　　室町時代

天目茶碗をのせている台であるが、もともと仏前に献茶の時、茶碗をじかに置かずこの台が使用され、それが貴人への呈茶にも使用されるようになつたと云われている。天目台は、ほうづき、羽根、高台の三部分から構成され、その表面の装飾方法には朱漆、黒漆のほかに、彫漆、青貝、蒔絵、木地のまゝなどの種々の方法が用いられていた。この天目台は朱塗りで、ほおづき、輪花形の羽根、高台の部分全面に金箔が押されたものである。普通根来塗と俗称されるものであるが、この台は成形も美しく整い、気品がただよう優れた作品といえよう。ただ一基しか伝えられていないのが残念であるが、細川幽斉と深い関係をもつこの寺院に伝えられていることは故なしとしない。

（守田公夫）

二、絵画作品の調査

調査した絵画作品の数は百五十一余件に及んだ。それらの大半は江戸時代の作品であつたが、その中に史料的価値をもつ注目すべき絵画作品をいくつか見出したことは意義ある調査であつた、作品

第2図　法華経曼荼羅図

全体を通じて得られた成果は次の三点にしぼられよう。

第一は、特定の地区という限定なしに資料的価値高く、重要な意義をもつ作品をいくつか指摘できること。第二は、特定人物の伝来をもつた遺品が、いくつか諸寺に伝えられていて、それらの作品より室町時代に生きた一人の人間活動及びその背景を推測できること。例えば智海僧正筆不動明王像。第三は、作品の紙背などにその作品の成立事情あるいは、伝来が記録されていて、舞鶴地区の歴史を理解しようとする時に参考になる「仏涅槃図」が諸寺に蔵されていたこと。この三点は、この地区に残る絵画作品にみられる大きい特色であり、殊に第三においては郷土史的価値の高いものといはねばならない。

まず、第一の部類に属する作品は、松尾寺蔵の「法華経曼荼羅図」「求聞持虚空蔵菩薩像」「不動明王像」「愛染明王像」「伝白馬寺古図」「松尾寺伽藍図」雲門寺蔵の「開山国師像」が挙げられる。

第3図　不動明王二童子像　円隆寺

法華経曼荼羅図　一幅（第2図）　松尾寺蔵

絹本着色　78.0×68.3　鎌倉時代

本図の第一重には、釈迦仏、多宝仏の二仏が併坐している多宝塔、その周囲の八蓮弁の上には文殊　薬王　妙音、常精進、無尽意聖観音、普賢、弥勒の八大菩薩、その四隅には須菩提、舎利弗、目蓮、迦葉の四尊が配位されている。第二重には、得大勢菩薩などの十六尊が第三重には不動明王などの十六尊が位置する通形の法華経曼荼羅図である。

巻留めに墨書「法華曼荼羅　宅磨筆　松尾寺現住本端修□□」

全面に補彩や書きおこしがみられるが、第一重の空間とか八葉蓮弁上の各尊の光背、多宝塔の扉、蓮弁には当初の彩色が僅かながら残っている。空間は緑青を下地としてそれに格子文を切金で表現する。八大菩薩台座の蓮弁は群青と淡緑青で、大きな八葉は胡粉を地にしているが、八大菩薩の月輪とは濃淡で区別している。更に、八大菩薩の光焔は紅をゆるやかに弛すやり方で最もよく当初の姿をとどめているところであろう。八葉蓮弁上の薬王、常精進、聖観音、弥勒の四尊の衣に朱が残るが、これは当初のものである。肉線は紅で描きその上に墨の鉄線描で仕上げ、顔部はうすく紅を弛す。全面的な補彩あるいは、多宝塔の屋根に画絹の欠失もみられ画趣を損ねてはいるが、本格的な仏画で、今回の調査のうち最も格調高い優品といえよう。鎌倉も初期に属すべき作品である。

第二の部類に属するものとしては、円隆寺蔵の「不動明王二童子像」

松尾寺蔵の「永聞持虚空蔵菩薩像」「不動明王二童子像」「五大明王図」多禰寺蔵の「不動明王像」がある。松尾寺の「求聞持虚空蔵菩薩像」と「五大明王図」以外は、いわゆる白描画であるが、度重なる修理に際しても当初の記録を失わずに書き留めていることは「智海」に何かの意味のあることを考えさせるであろう。

「丹後興謝海図誌」（円後史料叢書第三輯）に「智海」については、「大聖院明応の頃、智海憲海両高僧住す。一宮の供僧也。智海は画に妙なり」と述べているのは看過することはできない。また、「丹後風土記」（丹後史料叢書第一輯）によれば、「長享二年」に「大聖院権大僧都真言大阿闍梨智海」と書写されており、これからみて、「智海」という僧侶が十五世紀後半に活躍したと想像される。この智海と、今回の調査で注目した智海とは同一人物とみて間違いはあるまい。

円隆寺の「不動明王二童子像」は、中尊の不動明王の胸部に、「アビラウンケン」の五字を梵字で書き、多禰寺のそれにあつては、図中の右方に、「バンウンタラークキリーク」の五字を梵字で記している。さらに、前者と同系のものとしては、松尾寺のものがあり、それには「弘治弐年五月吉日　一宮大聖院大僧都法印憲海書之」と、その製作についての諸事情を明らかにしている。それらは同系統の「不動明王図」と推定して誤りなく、恐らく、中世当国一の宮「籠神社」を中心に展開した修験の信仰遺品ではあるまいか。

不動明王二童子像　一幅（第3図）　円隆寺蔵

紙本墨画　70.6cm×31.9cm　室町時代

智海筆の「不動明王像」は多禰寺にも松尾寺にもあるが、この不動明王・二童子像においては、不動明王の胸部に「アビラウンケン」（梵字）を記し、図中右方に「智海　花押」と墨書。智海僧正の研究資料に重要な作品であろう。

多禰寺本尊図　一幅（第四図）　多禰寺蔵

絹本著色　72.5×45.5　室町時代

本図は中尊に薬師如来、右下に烏帽子をかぶり裾をつけた狩衣姿の人物像を、左下には弘法大師の立像を描く一種の薬師三尊図である。薬師如来と弘法大師の組合せも類例少ないものであろうが、尊名を定かにしえない神像の侍立するのもまことに本図独自のものと思われる。弘法大師と密接な男神像といえば、高野明神をすぐ想起できるだろうが、本図のそれを高野明神と想定するのは差控えておきたい。

中尊の薬師如来は、本寺本尊と極めて似ている。恐らくそれを模写したものと考えられよう。従つてこの図は、多禰寺の一種の垂迹画と

第4図　多禰寺本尊図

理解すべきものではあるまいか。

第三の部類に属するものには「涅槃図」がみられるが、この図は宗派にかゝわらず広く行きわたっている仏画である。この地区の調査においても、地雲寺、高福寺、宝寿寺、円隆寺、長江寺、大泉寺、本行寺、松尾寺、桂林寺等の諸寺に伝えられて、いづれもそれらの紙背には製作の意図、寄進者名、製作年代などが入念に墨書されている場合が多い。したがつて、それぞれの「涅槃図」にまつわるいろいろな事情がよく理解されるのである。それらの多くは、寺院に関係深い土地の講の人達が費用を寄せ集め、京都あたりの仏絵師に注文するという、いかにも江戸時代的な仕組みで製作されている。そして、それは舞鶴を地盤としたそれぞれの寺院の信仰的なこと、あるいは経済的なことを伝えているので、「涅槃図」を主体とした信仰の伝播を考察するうえに貴重なものとなろう。舞鶴の歴史の一端を解明するためには取上げねばならぬ系譜である。

いまその一例を桂林寺の「涅槃図」をみると、この作品は絹本著色で275.7×247.5の大きいもので、この地区は伝えられている「涅槃図」のうちで作風もよく室町時代のものである。紙背の墨書をみると、

寄進者名略

右丹後国分寺涅槃像興行国富右京亮信真

絵師　城州　窪田又次郎　統泰

表具師　武部郷周芳

奉行　尊呈

従大永三年壬午拾月九日

丹後符中国分寺雖為寺物子細有ㇾ米津万福寺之寺物用之昔永禄九年歳涅槃像絹五幅常光院重阿致勧進一幅雖仕立候此絵像如形成絵ㇾ而候間永禄九ㇾ沽脚仕ㇾ此絵ニ仕替候条前之壇那ㇾ記之畢道俗貴賤男女一紙半銭之旦那等

権守　宗見禅門

同女　妙才禅尼

木戸九兵衛

雲芳紹英信士

花見翁常春禅門

天育妙性大姉

この他、「慶安二年八月」には「絵師木村清順公」によつて修覆され、「寛保四年」には「表具師田辺住中岡松右衛門尉」により「文化十年」には「田辺住表具師吉兵衛」によってそれぞれ修理されていることが明記されている。また、それに際して多数の土地の人達の寄進のあつたことも記されていて、この作品を通じて寺院とそれを支える人々のつながりがよく知られる貴重な郷土史的価値高い作品といえよう。

（清野　智海）